

## 京都大学ブータン友好プログラム 第12次訪問団報告

法学部一回生 太田有紀

私たち第12次ブータン訪問団は、京都大学ブータン友好プログラムの一環として、2014年2月18日から26日まで現地に訪問しておりましたのでご報告いたします。

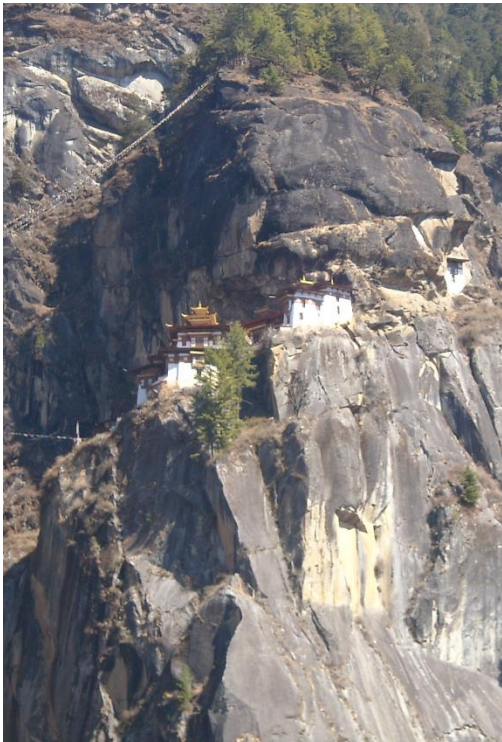
### 訪問日程

- 2月18日 関西国際空港発 機内泊
- 2月19日 パロ国際空港着 GNH委員会の Sonam Choki さんと会食(ティンプー)
- 2月20日 ティンプーの小学校見学、National Referral Hospital 見学、  
ブータン伝統医療センター見学、B-mobileのエンジニアの方に面会、  
ティンプー観光(メモリアル・チョルテン)、在ティンプー京大関係者と会食
- 2月21日 国王陛下誕生日記念行事見学、BHU 見学、ワンデュポタンへ移動
- 2月22日 プナカ観光(市場見学、チミラカン、プナカゾン)
- 2月23日 パロに移動、Paro Collegeの学生と交流(クル体験、食事会)
- 2月24日 Paro College 構内見学、タクツァン見学
- 2月25日 パロ空港発、バンコク空港経由
- 2月26日 関西国際空港着

メモリアル・チョルテン



タクツァン



## 幸せの国—ブータン

日本にいるときに本やテレビでブータンは幸福度の高い国だと紹介されており、私の中で漠然とブータン=幸せの国というイメージが出来上がっていた。

しかし、大学に入って、ブータンに関するゼミをとり学ぶうちにブータンへのイメージが変わりつつあった。雄大な自然や伝統的な生活など魅力的な面が見られる一方、GDP で考えれば発展途上国に属し、経済的に豊かとはいえず、治安もよくないなどの裏の事情も知り、ブータンが言う幸せって何だろう、そもそも定義できるものでないのではないか、一人ひとりにとっての幸せは違うはずなのに、どうしてブータンは一概に幸福度が高いといえるのか、そんな疑問を持ちはじめた。

そこで、どんな要素がブータン人の幸せに影響しているのか、そのことに関して今回、実際にブータンに行き、この目で現地を見て感じたことを書こうと思う。

まず、ブータンは宗教色の強い国だった。日本では無宗教が多かったり、信仰している宗教も神道やキリスト教など様々な種類がある。だから、ブータンのように国民全員が仏教を信仰しているというのは不思議な感覚だった。どの家や店に行っても曼荼羅や仏画が貼ってあって、道のあちこちにマニ車が置いてあり、ストゥーパや仏教寺院もたくさんあった。



GNH 委員会の方のお話によると、ブータンの国家政策の4つの柱は経済的發展、文化的・精神的な面の保護、良い政治、環境保全であるそうだ。GNH(国民総幸福)を上げるために重んじるべき4つの要素に精神という宗教的・思想的な要素が入り込んでいるのは面白いと思った。ブータンでは、政策の中心に精神的な要素も入っており、それが成り立つのは、ブータンが仏教社会を前提とした社会であるからで、日本とはまた違うと感じた。そしてこのブータン人の仏教への深い信仰心が国民の幸せに影響しているのかもしれないと感じた。慈悲の教えや殺傷の禁止、輪廻転生の教えなどがブータン人の精神に根付いており、穢れのない気持ちで人と接し、生きているのではないかと。信仰心は彼らの心をきれいにし、それ故、幸福と感ずることにつながるのではないかと考えた。



また、信仰心のほかに、ブータンの雄大な自然がブータン人の幸福につながるのであると感じた。実際にブータンの風景を見てまわって思ったことだが、山でも畑でも川でも、すべてが広大で思わず引き込まれてしまう、そんな不思議な力がある土地であった。豊かな自然に囲まれていることで、なぜか安心感が生まれたし、時間がゆっくり流れているような感覚になった。眺めていると穏やかな気持ちになった。ブータン人の穏やかな気性は、このような風土の中で生きていくうちに形づくられたのだと思う。つまり、ブータンの広大な自然は人々の性格にも影響し、精神的な幸せと大きく関わっているのだと思う。

上で述べた通り、私は様々な要素の中で特に、信仰心と自然、この2つがブータン人の幸福に大きく影響しているのだと思った。しかし、ここ数年の近代化の動きを受けてブータンの自然が失われつつあるということを知った。自然を保護しようとして、景観を守るため新しく建てる建物に制限をつけたりするらしいが、近代化がどんどん進んでいくと、この素晴らしい自然がいつか失われてしまうのではないかと少し悲しく思う。先進国の立場から、今ある自然が失われるのに反対することは勝手であるのは承知している。ブータンは自然保護よりも経済発展を目指したいかもしれない。それはブータン人の意思で決めるものだから例え自然破壊が進んでも仕方がないのかもしれない。だが、自然を守るか、近代化を進めるか、どちらかをとればもう一方が完全に失われるという話でもない。近代化と自然の保護のバランスをうまくとった方法だってとることができるのではないか。ブータンは人口も少なく日本とはまた事情が違ってくるはずだ。ブータンなりの活路を見出せるのではないか。現在、勢いを増した近代化の中でブータンは選択の場に立たされている。が、それはまた、色々な可能性を秘めているということ

意味するのだ。幸福の国としてだけでなく、これからは可能性のある国としてもブータンを見ていきたいと思った。



最後になりましたが、この度の渡航は京都大学教育研究振興財団の助成により、京都大学ブータン友好プログラムの一環として行われました。今回の訪問を実現させていただきました京都大学霊長類研究所の松沢哲郎先生、京都大学東南アジア研究所の松林公蔵先生、ご多忙のところ膨大な事務手続きをして下さいました酒井道子様をはじめとする関係者の方々に深くお礼を申し上げます。そして今回の訪問に引率して下さいました京都大学東南アジア研究所の坂本龍太先生には渡航中はもちろん渡航前から本当にお世話になりました。ありがとうございました。